

水田漁撈の未来

The future of paddy field fishing

安室 知*

YASUMURO Satoru

1 , 水田漁撈とは何か

水田漁撈を論じるとき、その舞台となるのが水田用水系である。従来、内水面漁撈の場は、湖沼と河川に分類されてきたが、第3の水界として水田用水系は重要である。水田用水系とは、水田・溜池・用水路といった稲作のために作られた人工的水界を指し、その特徴は稲作活動により一年をサイクルとして水流・水量・水温などの水環境が多様に変化することにある。

水田漁撈とは、水田用水系を舞台にして、稲作の諸活動によって引き起こされる水流・水温・水量などの水環境の変化を巧みに利用して行う漁撈法である。漁の対象は、水田に高度に適応した生活様式を持つドジョウやフナなどの水田魚類である。水田漁撈は、漁獲原理の上で、受動的で小規模な漁撈技術を多用する水田用水期(4～9月)と能動的で比較的大規模な漁撈が行われる水田乾燥期(10～3月)の2期に分けられる。

水田漁撈の歴史文化的な意義として、次の4点を指摘することができる。1.稲作民における自給的生計活動(動物性タンパク質獲得技術)としての重要性。2.金銭収入源としての重要性。3.水田漁撈が生み出す社会統合。4.水田漁撈の娯楽性。

しかし、日本の場合、水田漁撈は、1950年代後半、稲作の工業論理化(農薬や化学肥料の大量使用と基盤整備事業の進行)による水田生態系の変貌とともに姿を消した。

2 , 水田漁撈の復活 - 環境思想との出会い -

水田稲作が環境保全型農業そして環境創造型農業として注目されていくとき、水田における人とイネと魚(水田生物)の関係は環境思想におけるワイズ・ユース(wise use)の考え方と合致した。

そうした環境思想との出会いにより、1950年代後半にいったん姿を消した水田漁撈は、90年代以降、文化資源として再発見されることになる。しかも、それは「自然との共生」「環境に調和的」という付加価値さえ付けられる。そうして文化資源化された水田漁撈は環境教育の教材として、また地域振興のイベントとして各地で復活することになる。

注目すべきことに、1960年代にドイツで提起されたフォークロリズム概念が日本へ導入されるのはやはり90年代になってからであるが、それはまさにワイズ・ユース概念の日本への紹介とほぼ同時であった。この出会いにより、自然をめぐる民俗技術のフォークロリズム化はいっそう促進された。日本にとって90年代はまさにフォークロリズムの潮流と環境思想の潮流とが交錯するときであり、また同時に環境思想において人と自然の二元論を超える方途として「民俗技術」や「生業」へ耳目が集まるときでもあった。

* 国立歴史民俗博物館、National Museum of Japanese History

水田漁撈、フォークロリズム、水田魚道

3 , 文化資源としての水田漁撈

1990年代になって復活を果たした水田漁撈は、かつて持っていた他の民俗との関係性（食や信仰・儀礼など）はすでに断たれており、文化資源として断片化・道具化されたものであったといえる。しかし、それは、復活という点に力点を置くなれば、断片化の修復、現代社会における新たな関係性の獲得として評価すべきことである。

民俗事象の文化資源化の問題を考えると、たいていはその資源的価値を「地域らしさ」「その土地ならではの」に代表されるような地域の個性や独自性あるいは土着性といったものに求めている。その結果、文化資源化されようとするとき民俗事象（とくに民俗芸能や祭礼）は地域らしさの面ばかりが強調されることになる。

そうした独自性を強調するかたちで進められる文化資源化がある一方、まったく反対に何処でも目にすることができた民俗つまり当たり前の生活といったものについても文化資源化は進んでいる。そうしたものの典型がここに取り上げた水田漁撈である。その文化資源化の背景には、もうひとつの潮流が存在したと考えられ、しかもそれは行政を動かす法や条例を変えるほどの力を持っていた。それが国境を越え市民的なレベルで進むワイズ・ユースのような環境思想であるといえる。

現在、民俗学の中で進められるフォークロリズムの議論のように、行政の作為や政治性といったことだけに民俗の復活を結びつけてしまえば、現代民俗のあり方を狭く捉えすぎてしまうことになりかねない。水田漁撈の復活劇は、紛れもない民俗現象であり、そこにはかつての水田漁撈が有していた社会的・民俗的なリンクとはまた別のさまざまなリンクが新たに構築されつつある。

4 , 水田漁撈の未来 - 断片化から新たな社会的・民俗的リンクの獲得へ -

水田漁撈の復活という現象を通してみても明らかなように、環境思想の市民化・大衆化の動きとともに、農村の人為的自然環境（二次的自然）は今後ますます重要な意味を持つようになってくるであろう。

そうしたとき、民俗の文化資源化の問題に関連して、他の民俗との関係性を失い断片化・道具化された民俗事象の行く末について考える必要がある。

現在の水田漁撈は環境思想の市民化・大衆化の中で新たな社会的・民俗的リンクの獲得を果たしたかに見える。しかし、現段階では、それはまだ非常にもろいものであるといわざるをえない。環境思想の移ろいとともに、一度断片化され、道具化されてしまっている水田漁撈は、環境教育や地域振興の素材として魅力を失ったとき、いとも簡単に他のものに取って代わられてしまうであろう。

そうした現状の中、今さまざまに進められている「水田魚道」や「ビオトープ水田」の試みは、いくつかの懸念される問題を有しながらも、現代社会において新たな水田漁撈の社会的・民俗的リンクを補強するものとして注目に値する。

今一度、水田漁撈に関しては、過去に遡ってその歴史文化的な意味を問うとともに、未来に向けて現代社会における存在意義について考えてみなくてはならない。水田漁撈のような自然に関する民俗技術の復活を、たまたま環境思想という追い風が吹いたためにおこった一時のブームとして終わらしてはなるまい。